

# **私の英語・英文学50年**

**Fifty Years of My Career as a Professor of English**

**米 須 興 文**

**Okifumi Komesu**

## ABSTRACT

This essay recounts my career as a student and teacher of English, which had its beginning on Saturday, August 4th, 1951 and ended on the same day of the month and week fifty years later: a strange coincidence coupled with another that marked a Golden Jubilee of the IAUPE (International Association of University Professors of English) on the same date in Bamberg, Germany. There I concluded my career by being invited to contribute two papers for the occasion, one orally presented at the conference and the other included in the Jubilee Volume of essays written by 20 representative members of the Association.

The present article is a narration of various fortunes and adversities that I experienced in my life and during the half century of my career. The epigraph quoted from Shakespeare is meant to portray myself as a player on a stage of life, beginning with "the whining school-boy, with his satchel...creeping like snail / Unwilling to school," leading up to the "Last scene of all, / That ends this strange eventful history...." I played various roles from act to act on the stage, ranging from one of a bartender at a US military recreational facility on Okinawa to that of an academic delivering a lecture on Yeats at an international seminar held in the poet's country, Ireland. Mine has been indeed a "strange eventful history," attended with many difficulties; yet it has been a truly rewarding one.

**All the world's a stage,  
And all the men and women merely players:<sup>(1)</sup>  
———— William Shakespeare**

## 1. Prologue

シェイクスピアに倣って人生を芝居の舞台に譬えるなら、私の人生の第一幕は、私が生まれた昭和6(1931)年に始まった15年戦争の時代ということになる。演じていた役は、「その他大勢組」の中の1少国民、ひとりの軍国少年であった。その軍国少年は、いずれの日か砲煙弾雨の戦場でヒーロー(主人公・英雄)を演ずるべく胸の血を昂ぶらせていたが、芝居はあっけなく「どんでん返し」となり、少年の夢と憧れはたちまち烏有に帰した。

その後「幕間」の戦後数年を経て、1951年に私は人生の第二幕に入ったが、それは第一幕と打って変わり、舞台は英文学の勉強というまことに平和な筋書きであった。しかも、第一幕ではantagonistでありarchenemyであったアメリカで専門の教えを受けたのだから、この筋書きはまさに「どんでん返し」を絵に描いたようなものであった。

軍国少年が文学少年に変身し、しかも旧敵国の文学を研究する生業を身につけるようになるには、それなりの伏線がある。その経緯はこうである。

## 2. The Curtain Raiser

それは太平洋戦争末期の1945年から終戦の翌年の1946年の暮れまで疎開生活を送った九州・大分県の山間にある浄土真宗の寺に遡る。疎開地で病に倒れた母を失い、弟と二人その寺のご一家にお世話になっていた時のことである。ご一家の大恩をわれわれ兄弟は生涯忘れることはできないが、私自身にとってもその寺で将来を決定づける原点ともいえるべき貴重な三つの出会いがあった。即ち、文学との出会い、英語との出会い、そして新渡戸稲造の欧米留学記『帰雁の蘆』との出会いである。そのいずれを欠いても私の現在の英語・英文学人生はなかったことだろう。一見、仏寺のイメージとそぐわないこの三つの出会いは、奇しくも九州山奥の古刹で三条の運命の糸となって結びつき、私の英語・英文学人生を紡ぎだしたのである。

お世話になった寺の住職は旺盛な読書家で、寺の本堂には数千冊の本が本棚に所狭しと並んでいた。住職の読書範囲の広さを反映して、蔵書は仏典、漢籍、歴史書、各種エッセイ集から和洋の文学叢書に及んでいた。街の図書館がほとんど焼失していた終戦当時、これだけの蔵書を目にするだけで私は心が踊った。もともと読書好きではあったが、このころの私は疎開地で頼みの綱の母を亡くし、軍国少年の夢を失い、底知れない無力感の虜となっていたので、読書は大きな癒しを提供したのである。自由に読んでよいという許しをえて、私は時間の許すかぎり乱読に近い形でそれらの本をむさぼり読んだ。無政府主義関係の思想書や『十八史略』等の漢籍は、14歳の少年がどう背伸びしても手の届かないところにあったが、内外の文学書には心を奪われた。それまで名前しか知らなかった、漱石、鴎外、二葉亭四迷、田山花袋、志賀直哉、有島武郎、芥川龍之介等の作品を初めて読んだ。外国文学ではロシア文豪の作品が多く、トルストイ、ドストエフ

スキー、ツルゲーネフ、ゴーリキー等の作品に初めて触れた。これらの作品を読むにつれて、元軍国少年の感性は、その単純にして殺伐とした内的世界から豊潤な想像力の世界へ飛翔していったのである。

これらの図書の中から私が生まれて初めて目にした英文学作品は、ワーズワース詩の断片で、國木田獨歩のエッセイに日本語訳で引用されていた。これはずっと後で分かったことなのだが、通称 "Tintern Abbey" <sup>(2)</sup> という詩の中で英国西部のウェールズ地方に流れるワイ川を描写した部分であった。「おお、森深きワイの流れよ！汝林間の逍遥子よ」。この一行は、獨歩の文章に感動した私の記憶に今でも鮮明に残っている。獨歩は、エッセイの中でワーズワースにもはや感激しなくなった心境を告白し、それは自分がワーズワースを見捨てたからではなく、自分がワーズワースに見捨てられたからなのだと嘆いている。私は、獨歩の心をこれほどまでに揺さぶったワーズワースとは如何なる詩人であろう、いずれの日か英語をマスターして原詩を読みたいと思ったことであった。

この時のワーズワースとの出会いが私の英文学人生の扉を開いたのであったら、それは実にドラマティックな始まりであり、このエッセイもスリリングなストーリーになったであろうが、人生はそれほど面白くはできていない。実は私はこの出会いのことをすっかり忘れていて、この時から8年後、アメリカ留学時代に「ロマン主義運動」という科目を受講していたときにワーズワースの原詩でこの詩行と再会したのである。("O sylvan Wye! thou wanderer thro' the woods. "). 更に十数年後、初めて英国のウェールズ地方を旅したとき、兩岸に緑の森が迫るワイ川を小舟で蛇行しながら下り、ティンタン寺院の廃墟に着くまで現れては流れ去る兩岸の景色に眼を楽しませた。まさに林間をワイの流れと共に逍遥するような気分であった。詩人の作品をなぞりながら現地を放浪するうち、私は詩的想像力を刺激され、思春期の追憶とワーズワースの詩情と周囲の景観が渾然となって、えもいわれぬ情調で心が満たされた。このような経験をしようとは、少年の日夢想だにしなかった。

というわけで、本物のワーズワースとの出会いは後の話で、ワーズワースを含めて英文学が直ちに私を魅了したわけではなかったのである。寺の蔵書の中では英文学関係はむしろ少なめで、外国文学で質量ともに強い印象を残したのはロシア文学叢書であった。

私が英文学に興味をもつようになるには、当然ながら英語との出会いが必要であった。英語はもちろん学校で習っている。しかし、当時の教室英語は英文学と直結していない。英文学に到達するには、文法・訳読式教室英語の次元を越えた、血の通った英語との出会いが必要であった。そういう英語との出会いに私を導いた二つの幸運が私にはあった。その一つは寺の蔵書の中に新渡戸稲造の欧米留学記、『帰雁の蘆』<sup>(3)</sup> を見つけたことである。

『帰雁の蘆』は新渡戸の欧米留学生生活を魅力的に描いたエッセイ集であるが、敗戦直後の暗い日本の少年にとっては凡そ現実離れのした話しであった。ことに戦災孤児になって寺ご一家の慈悲にすがって露命をつないでいる私が、新渡戸の留学記を自分の将来と重ね合わせて考えることなど正に幻想を追うに等しかった。しかし、童心には幻想を現実に変えてしまう弾力性がある。この本は、失意のどん底にあえいでいた私に新しい夢と希望をもたらした。この本と出会ってから

の私は、力を入れて英語の勉強に励むようになった。

英語との出会いを決定的にしたもう一つの幸運があった。それは、午後6時15分から30分までNHKから放送される平川忠一の「ラジオ英会話」番組が聞けたことであった。当時ラジオは一般の家庭で置いてあるのはまれで、ラジオが聞けるような環境にいることは一つの特権といえる時代である。汽車通学をしていた私は、番組の時間に遅れないように寺にもどるために駅から1時間の山道を息せき切って駆け登ったものである。

平川忠一の「ラジオ英会話」は英語に対する私の認識を一変させた。日本人離れのした平川の英語の発音とゲスト出演する進駐軍のアメリカさんが話す本物の英語を聞いて、英語とはこういう音でできていたのかと目からウロコの落ちる思いがした。学校で教わる英語に不信感が湧き始めたのもこのころで、中学2年生としては誉めた話しではないが、本物の英語との乖離は歴然としていたのだから、致し方あるまい。この頃から、私は放課後、帰りの汽車の発車時刻までの時間を利用して、非番で街に繰り出しているアメリカ兵に話し掛けたり、英語の教科書を音読してもらったりして本物の英語に触れるように努めた。

### 3. L'entr'acte

1946年の年の瀬も押しつまるころ、沖縄疎開者の引き揚げが始まった。戦後の混乱期にあって、沖縄の状況はよく分からなかったが、生活が万事アメリカ式になっているという風評が流れていたのも、私は英語の勉強に大きな期待をもって引き揚げて来た。ところが、この期待は見事に裏切られてしまった。

沖縄は、＜鉄の暴風＞が吹き荒れた後だけに本土の都市の焼け跡とは比べものにならないほどの荒廃ぶりであった。その無残な姿は、当時の沖縄でよく杜甫の五言律詩「春望」に描かれている「国破山河在/城春草木深」(国破れて山河あり、城は春にして草木探し)の情景に比況されていたが、むしろ李白が「古風(其十三)」に描く「荒城空大漠/邊邑無遺堵」(荒れたる城は大いなる漠に空しく、邊の邑には遺りたる堵も無し)の惨状を彷彿とさせるものであった。わが家も家屋はいうまでもなく、屏風も跡形も無く空しくなって石造りの家の門も消えうせていた。

国破れて山河さえ形を変えてしまった沖縄の生活は、アメリカ式どころか、戦争の後遺症が歴然として、人びとの心も難民の心に変貌していた。「戦果」という言葉がキーワードの観を呈して、食料、被服、生活用具等すべて米軍のおこぼれに与る有様であった。ついでに言葉も英語からかっぱらって、庶民の間に怪しげなブローケン・イングリッシュが大量に流布していた。親戚の子供が「サナバベッチ！」を連発していたのには面食らったし、隣の青年が仲間に「ヘイユー、ギミーセグレ」と煙草をねだるのを聞いて、その「流暢さ」に感じ入ったものだ。米琉混合語も氾濫していて、「うれえノグイ (no good) どう、くり使れー」(それ、だめよ。これを使いな)、「あんせー、テンキューやさ」(じゃ、ありがとうね)などと、「ワッシギョール」(洗濯婦)たちは大らかにさえざり合っていた。

こうした草の根レベルでの英語化とは別に、教育を受けた階層でも終戦直後の沖縄の英語熱は本土よりいっそう高まっていた。圧倒的多数の就職口は米軍基地が提供していたから、若者たち

は猫も杓子も英語の勉強に血道をあげていた。ところが英語の学べる上級学校は「沖縄外語学校」<sup>(4)</sup> だけしかなかった。したがってこの学校は大変な難関で、高校の現役から突破するのは至難の業であった。しかし、高校卒業の際に、私は考えるところがあって「外語」へ敢えて挑戦をしなかった。新設の野嵩高校第一期生だった故であろう、私は先生方からしきりに受験を勧められ、何度も職員室に呼ばれて熱心な説得を受けたが、「外語」に受験して、仮に合格したとしても入学する気はなかったので、不受験を貫き通した。通りすがりの若い先生から「米須君、君は独学で英語をマスターする自信があるのか、たいしたもんだね」と毒舌を浴びせられ、気持ちが落ちこむ一幕もあった。早稲田大英文を中退した経歴をもつ父の暗黙の了解が、わずかな救いであった。

私は九州の疎開地での「言語体験」から、言語習得は子供の時にその言語環境で音声から始めるに越したことはないことを肌で感じとっていた。疎開者は最初大人も子供もヤマト口が不自由だったが、子供たちは半年もたたないうちに土地の言葉を自由自在に話すようになったのである。大人は引き揚げのときまで土地の方言に馴染めず、<sup>とつとつ</sup> 訥々と下手な標準語でコミュニケーションに苦労していた。私は、英語も大人になってからではマスターするのは難しいだろうと思った。高校を卒業したとき17歳になっていた私は、もう一刻も無駄に出来ないと危機感を募らせた。英文法は自分で勉強できる。語彙力は辞書で養える（これは浅はかな考えであった）。読解力も参考書によって身につけられるだろう（これも大誤解であった）。だがリスニング（当時はヒヤリングといていたが）とスピーキングは英語を話す相手が要る！当時の沖縄の高校生にとってエリートコースであり、憧れの的だった「外語進学」のチャンスを捨てても米軍基地の英語環境を選ぶべきとの結論に達した。私は四六時中英語を話す仕事はないものか、と思案した挙句、それは米軍クラブのバーテンであろうと思い当たった。そして、ある部隊の将校クラブにバーテン見習として就職することが出来た。

私のねらいは違わず、将校クラブは英語学習の場として理想的な職場であった。小さなクラブだったので、昼夜2交代制でそれぞれバーテンの勤務は一人ですんだ。そのため勤務中に話す言葉は都合よく英語だけであった。また、割とのんびりした職場だったので、馴染みのお客さんからカウンター越しに英語の発音や表現等をずいぶん教えてもらった。発音といえば、クラブにはたくさんのレコードとプレーヤーがあったので、ジャズやポップスを聞いたり歌ったりしているうちに英語の発音が自然に身についてきた。ジャズやポップスは、私の青春のうたになった。

また、この職場は英会話習得にとどまらず、アメリカ文化を学ぶ絶好の場でもあった。アベックで来る客からは、アメリカ男性の女性に対するマナーが分かったし、お客さんの寛いだ会話やパーティーなどの社交の場での談笑からアメリカ人の物の考え方や価値観を知ることもできた。また、親しくなった黒人の中尉が「アメリカには黒人に対する人種差別がある。国に帰ったら、おれなんか白人のクラブへは入れないんだ」というのを聞いて、当時のアメリカにおける人種差別の一斑にふれ、民主主義の国、アメリカの暗い部分を見る思いがした。

クラブには幾種類もの雑誌がラックに備え付けてあり、興味にまかせて記事を読むだけで英文の読解力の養成に役立ったし、また記事からはアメリカについての新しい生の情報も得られ、ア

アメリカへの認識が深まった。アメリカの社会や文化についてこうした学習ができるとは予想外のことであった。言語が文化から切り離せないことを考えれば、まさに生きているアメリカ文化の中で生きた英語と日々接することができたのであるから、願ってもない職場に就職したといえる。こうして私の英語は次第にサマになっていき、ついには昂じてスラングなども覚え、それを得意げにアメリカさんにぶっつけては爆笑をさそったりした。

#### 4. Act II

1951年は私の人生の第二幕が始まった年である。その年の8月4日、土曜日は、私の英語・英文学人生にとってエポック・メイキングな日となった。その日、ガリオア資金 (Government Aid and Relief in the Occupied Areas) による米国留学生の選抜第一次試験が行われた。試験問題はUSCAR (米国琉球列島民政府) の作成したもので、アメリカ式の実用を重視した、当時としては意表を突く形式であった。リスニング能力を試す問題が約3分の2を占め、その他は短いパラグラフの読解力を見るテストと、15分間の自由英作文の問題から成っていた。私は無事一次試験をパスし、第二次の口頭試験に進んだ。

第二次試験の試験官は日系二世の女性で、受験者を一人ひとり面接室に入れて試問していた。その朝、私は遅れ気味に試験会場へ向かった上に、突然襲ってきた豪雨につかまり、ずぶ濡れのまま受験者控え室に駆け込んだ途端名前を呼ばれ、雨の雫をしたたらせながら急ぎ面接室に入ったところ、試験官が "Oh my, you are all wet!" といったので、私も "Oh yes, ma'am, I'm soaked. Isn't it a nasty day?" と応じた。これで双方とも気分がすっかり和み、試問はじつに寛いだ雰囲気で行われ、しまいには雑談のようになってしまった。

この一連の「米留試験」は、結果的に高校卒業以来私がとった英語の勉強方法が最適の受験勉強法だったことを示した。しかし、当時の私に科学的な語学学習法の知識などあるはずはなく、私の勉強法は九州での言語体験とカンに頼った一種のカケだったのである。発想も素朴で、英文法より実践的英会話を、外語学校より英語が日常的に話される米軍基地の職場をというふうな俗っぽい思考回路を出なかった。そして、このような学習法ではアメリカの大学で正規の学生として勉強するための満足な英語力を身につけるには程遠いことが入学後すぐに分かった。

「ガリオア留学生」は、選拔されてから渡米まで約1年の待機期間があった。私は、その間、渡米留学に備えて専攻の英文学の勉強と英語力の養成に力を入れた。那覇じゅうの書店をまわって (といっても英語・英米文学関係書を扱っている書店は限られていたが)、参考書を買集めて勉強を始めた。英文法も、それまでお留守にしていたが、数種類の高等英文法書を購入して、あらためて勉強した。「外語」に行ってお勉強すべきだった「専門知識」を遅まきながら独学で手に入れようというわけである。

しかし、この努力は、渡米入学後ほとんど無益であったことが分かった。私がやるべきことは、英文読解力の強化と読書スピードの向上に努めることだったのである。私の前途に広がるのは英米文学の大森林である。わずか10数冊の日本語による英語・英米文学の参考書から得た浅薄な知識でこの大森林に挑むのは、まさに螳螂の斧の誇りを免れなかった。

1952年の秋、私は青雲の志を抱いてオハイオ州ニューコンコードにあるマスキンガム大学に入学した。しかし、入学早々私には大きな挫折感が待っていた。学期初めに行われた新入生の英語力のテストで実に無残な結果が出たのである。簡単な読み物を材料にしたテストで私の読書能力はクラスの最低で、読書スピードは1分間に130語、理解度70%と宣告された。アメリカ人のクラスメートの最低値が190語、最高値が420語だったのであるから、私の数値がいかに低いものであったか分かつというものである。打ちのめされる思いであった。これでは英文学専攻など高嶺の花ではないか。渡米前の私の勉強法に欠陥があったことが明らかとなった。

この英語力では留学期間の更新を勝ち取るのに必要な成績を確保するのはおぼつかない。ガリオア留学生は逐年契約となっていて、契約更新にはその都度平均以上の成績が要求されていた。私は覚悟を決めなくてはならないと思った。それで、いつ留学を打ち切られても悔いが残らないように英米文学の勉強を少しでもやっておこうと思い、無理な背伸びをして1年次の後期に英文科の専門科目から1科目、「Introduction to American Literature」を受講することにした。指導教官は渋い顔をしたが、事情を聞いてサインをくれた。

ところが面白いことが起こったのだ。私の英語力はぐんぐん伸びてこの学期の終わりには読書スピードは毎分230語になり、一年後には360語に達していた。どうやら英文学専攻としてやっていける目途が立ち、留学期間も逐次延長され、卒業のときは「優等」(cum laude)の荣誉まで受けてしまった。「終わり良ければ、すべて良し」というべきか。

英語読解力にまつわる私の体験は、外国語の読解力を向上させるためには、最も興味のもてる読書材料の洪水を浴びることが効果的であることを示しているように思う。

「好きこそ物の上手なれ」という。専攻科目は成績もよく、初めて受講したアメリカ文学のクラスも「A」の評価をもらった。英文科提供の科目はほぼ全科目受講するか、聴講したが、特に興味をもって勉強したのは現代英米文学であった。英国作家では、D.H. Lawrence, Virginia Woolf, W. Somerset Maugham等、米国作家では William Faulkner, Ernest Hemingway, Theodore Dreiser 等に強く惹かれた。詩人では、Ezra Pound, T.S. Eliot, そして後に私の研究テーマとなる W.B. Yeats に興味をおぼえたが、強い衝撃を受けたのは Eliot であった。Yeats は James Joyce と共に魅力的な創造的芸術家であったが、両者とも私は英国文学の範疇でとらえており、アイルランドという特殊な背景をもつ存在としての認識はあまりなかったように思う。初めて Yeats をのぞいたときに、A.N. Jeffares 教授のイエイツ研究書 (*Yeats: Man and Poet*, 1949) を瞥見した (ことを後に思い出した) が、この英国イエイツ研究界の泰斗と二十数年後に親交を結び、私の仕事を英国学界に紹介してもらえるなど当時は夢想だにしなかった。

マスキンガム大学は、小規模のいわゆる liberal arts college で、大学院のない学部課程大学であったが、教育水準は極めて高く、たとえばディベートの全国大会で、'53年、'54年と2年連続の優勝を果たしたほどで、英文専攻の学部課程大学としては申し分がなかった。

専攻外の科目の受講も自由だったので、私は英文科以外の科目もかなり受講した。殊にフランス語は、副専攻の資格単位数に達していた。サルトル、カミュ、スタンダール、フロベール等の作品を原語で読んだことは大きな収穫であった。ラテン語も8単位取ったが、これはモノにする



ことはできなかった。しかし、教授とは大変親しくなり、言語学の honors course（教授の招待による教授と1対1の特別講義）を受講する特典を与えられた。講義は一般言語学の基礎的な内容で、使用した教科書は Broomfield の *Language* であった。このときの勉強が言葉の問題に私が興味をもつ大きな契機となった。私が後に文学の言語的側面に興味をもつようになった素地は、この時に形成されたといっても過言ではない。

私は、また、哲学科提供の科目から「Introduction to Philosophy」、「Modern Philosophy」、「Ethics」等を受講した。哲学の基礎知識を得たにすぎなかったが、後に現代文学批評理論の勉強をする際に役に立った。

もう一つ、マスキンガム大学で得た大きな知的収穫がある。この大学は、Presbyterian 派に属する parochial school であったため、宗教教育は充実していた。別に洗礼を受けることを強制されるわけでもなかったのも、私はバイブルやキリスト教の歴史に関する科目を受講し、それまで無知であったキリスト教についての知識を得た。それはキリスト教文化圏の人間ならば常識程度のものにすぎなかったが、異文化に属する人間が西洋の文学を勉強するには絶対に欠かすことのできない基礎的な知識である。こうして得た知識は、私の英文学理解を助けただけでなく、疎開中に大分の寺で得た仏教に関する知識と共に私の教養の一部を形成する大きな財産となった。

私は、4年生になるまでには将来英文学者として生きていきたいと思うようになっていたので、学部を卒業したら大学院に進学して本格的に勉強をしたいと熱望したが、米政府からの許可が得られず帰国を余儀なくされた。

3年とひとりで学部課程を終えた私は、1955年の秋に帰国の途についた。乗船予定地のサンフランシスコには直行せず、アメリカの「深南部」から「大西部」へかけての大旅行を試みた。私はまずオハイオから車でニュー・オーリンズに下り、フレンチ・コートに宿を取って、フランス風の異国情緒を満喫した。「DESIRE」<sup>(5)</sup> の標識を掲げた電車ならぬバスが街路を通るのを発見して、とっさに飛び乗ってしまったのも思い出の一つである。

ニュー・オーリンズではジャズのライブも一晩堪能して西へ向かった。途中アリゾナ州、フェニックス周辺の砂漠を観光し、更にグランド・キャニオンに寄って大峡谷の景観を楽しんだ。しかし、私の胸にはオハイオを後にして以来ずっと、大学院進学の見途も立たないまま帰国する自分の将来への不安が黒雲のように広がっていた。ドイツ人の植物学者、ピープル教授に出会ったのはそのとき、大峡谷の断崖上の休憩所であった。教授はフルブライト研究員として1年間滞米して間もなく帰国するとのこと。40歳くらいの、いかにも研究に脂の乗ったという感じの精悍な表情の持ち主であった。コーヒーを啜りながらのよもやま話の言葉の端々にもご自分の研究のことがこぼれ出て、仕事への熱意がうかがえた。23歳の大学を卒業したばかりの私から見れば、すでに独自の研究の世界を築いている教授は雲の上の人に思えた。

しかし、私が本当にピープル教授に感銘を受けたのは、峡谷の見物の道々であった。時折路傍に注意を引く植物を見つけると近づいて手にとり、しげしげと観察するのである。峡谷の絶景に感嘆の声を発して、次の瞬間かたわらの草木に注意を向ける、その切りかえの速さには驚くべきものがあつた。私はその旺盛な好奇心に圧倒され、その真剣な表情に強く印象付けられた。その

後、私も本格的な研究の道に入り、多くの世界的な学者に師事する幸運に恵まれたが、研究者としての心構えの基本については、専門も違い、しかもただ一日だけの触れ合いのピープル教授に学んだ気がするのである。

沖縄へ帰ってから、琉球大学に学長秘書として就職して1年半ほど事務局にいたが、1957年、英文科教員の定員拡張に伴い講師として教壇に立つことになった。担当科目は一般教育科目の「英会話」であった。駆け出しの教師だから楽な科目を当てがわれたのだろうと思うが、専門の英文学に携われないことは淋しい限りであった。

また、英文学を独学しようと思っても、当時の琉大の図書館は英文学関係の蔵書が少ない上に雑多な種類の本が書架に並んでいるだけで、それらをアトランダムに読んでいっても乱読に等しく、英文学についてのシステマティックな知識の蓄積は到底のぞめなかった。私はアメリカへ戻って大学院に進学したいという鬱勃とした欲求を抑えられなくなった。

私が英文科に移籍したちょうどその年から琉大で若手の講師クラスの教員をアメリカの大学の大学院に送って一段と高い学位を取得させる研修プログラムが発足し、英文科から第一号が渡米した。私もこの制度を利用したいと思ったが、如何せん、私の前に先任者が3人もいるのである。私に順番が廻ってくるのはいつになるか分からない。結局、私は公費留学をあきらめ、私費で進学することを決意した。

## 5. The Player with All Work and No Play<sup>(6)</sup>

1958年の夏、私はミシガン州立大学（MSU）英文学科にTAの職を得て勇躍渡米した。琉大は休職したが、後日留学期間が長いと言う理由で辞表を提出させられた。

MSUでは英語センターに配置され語学ラボの管理の仕事についたが、外国人留学生のための英語の授業も1クラス担当した。ラボにはバイトの学生が10人ほどいたので、彼らの業務を取り仕切るのが主な仕事であった。また、英語のクラスは主としてヒスパニック系の留学生だったが、相手が外国人なので気分は比較的に楽だった。ただ、クラスの学生はなかなか統制がとれず、授業を始めるのに5、6分かかった。しまいには "Shut up!" と怒鳴らざるをえない始末。あまりの騒々しさに "You are the most disorganized bunch of people on earth; MSU frowns on you!" といってやったら、前列に座っていたメキシコ系の学生が "Mi-ister Gomez, you know what MSU mean?" と言う。私は "It means 'Michigan State University'." と答える。すると件の学生は "No, it mean 'Mexicanos Siempre Unidos'（メキシコ人は常に団結）。" と済ました顔でのたまうたのである。クラスは大爆笑。私もつられて笑った。しかし、私は後で考えさせられた。日本人学生だったら、あのような当意即妙な洒落を（それが仮に駄洒落であっても）いえるだろうか、と。しかも、件のメキシコ学生はアメリカへ来たばかりの、これから英語の勉強をしようという学生なのだ。そこはやはり西洋文化圏の人間、同じ文化のネットに包まれて下手な英語でもその場の文脈にはまった形になるのだな、と感にたえなかった。

TAは週20時間の勤務が義務付けられていて、名目上は月曜日から金曜日まで毎日4時間の勤務ですむはずであるが、オーバータイムが恒常化し、時間的には常に飢餓状態にあった。こうして、私

は学資と生活費を稼ぐために昼間は大学院の受講を除いては英語センターで働き詰めだった。勉強の時間はほとんど夜で、図書館に行き閉館時までがんばった。

働きながらの大学院生生活は厳しく、学部課程時代のように旅行などする余裕はなかった。わき目もふらずに勉強しても修士課程から博士課程までを終えるのに5年を要した。もっとも、修業期間が延びた理由は勉強時間が不足していたことだけではない。TAは有給の職についているから、大学院生としての受講単位数が1学期につき9単位以下におさえられていた。そのため、所定の単位数を蓄積するためには余分の学期が必要となるのである。その代わり、州外出身者が払う多額の授業料は免除されていた。受講科目数が正規の院生より少ないので、アサインメントの分量も適量で、成績もよい成績が取り易いといえた。私の成績は、修士・博士の全課程を通じてGPR<sup>(7)</sup>が3.8に達していた。時間はかかったが、比較的充実した勉強ができる境遇であったといえよう。

私の場合、別の理由でコース・ワークを終えるのが更に長引いた。その理由の一つは、言語学関係の科目を14単位も受講したことである。マスキングム大学の学部課程時代に言語学への興味を呼び覚まされたことはすでに述べたが、その後琉大で教鞭をとっていた時に、語学教師としてどうしてもphonology、morphology、syntax等のより専門的な言語学の知識が必要であることを痛感したので、この際勉強しようと思ったのである。

院の修学期間が長引いたもう一つの理由は、古代・中世英語を選択科目から9単位も取ったことである。琉大に帰ったら、英文学史や英語史も教えなければならないだろうから勉強しておいたほうがよからうという、琉大英文科の育ての親であったGeist先生の意見に従ったのである。この勉強は、のちのPh.D. 予備試験のために大きな力となったので極めて有益であったが、40年を経た今、中世英語はなんとか読めるものの、古英語はラテン語と同様、全く手におえなくなっている。どうやら私には語学の才能があまり無いようである。

というわけで、だいぶ時間はかかったが修士と博士の両課程を終え、外国語試験（フランス語）と6分野にわたる予備試験<sup>(8)</sup>（preliminaries、現在はcomprehensivesとよぶ）も無事クリアし、晴れて博士号取得候補者（Ph.D. candidate）となって学位論文執筆の資格を獲得するとともに論文審査委員会も設置された。

博士論文のテーマは、その後私の生涯の研究テーマとなったアイルランドのノーベル賞受賞詩人、W. B. Yeatsが認められた。ところが、私のイエイツとの出会いは全くの偶然であり、テーマをイエイツに決めるまで私はアイルランドについて無知同然であった。私がイエイツを選んだ理由は、ミシガン州立大学で「20世紀英文学」の講義を担当していたH. Adams先生の薫陶による。私は先生の講義を聴いて強くイエイツに惹かれたのである。

イエイツをテーマに決めたとき、私は当然ながらアイルランドの歴史や文学の消息に通じる必要を感じ、イエイツ研究の基礎的な作業としてアイルランドについて勉強を始めた。そして、この国があまりにもわが沖縄と似通った文化的プロセスを体験し、共通した国民性を有することに驚くとともに、イエイツとアイルランドに対して急に親しみが湧いてきた。しかし、私はこの親近感に研究者として逆に危ういものを感じた。沖縄人としての出自が研究に投影されるのではな

いかという危惧を覚えたからである。結局、私は民族詩人としてのイエイツには眼をつむり、西洋の知的伝統に位置付けられる現代詩人としてのイエイツを見つめることにしたのである。結果的に、私のイエイツ観はイエイツの半面だけを捉える狭いものになったことは否めない。

こうした禁欲的な研究上のスタンスは、その後の研究においても維持した。その代わりというわけでもないが、マスメディアの要請に応じて書く文章では、意識的に文化的な視点や歴史的体験の要素を取り入れて、常にアイルランドやイエイツを沖縄に引き寄せて書くようにした。その中で私は、研究論文で守る禁欲的なスタンスを捨て、奔放なペンの赴くままに書き綴った。自我のおかれた文脈を超越した禁欲的なスタンスが研究者としての私の拠り所であるとすれば、奔放な詩人的なスタンスは、実存者としての私が求める時間性に立脚した「視界」なのかもしれない。しかし、この二つのスタンスは統合できるのではないかと考えるようになったが、それは大分のちの話である。

## 6. A Boone's Trace<sup>(9)</sup>

1963年、私は後期に間に合わせて帰国するなら琉大英文科に復職させるという知らせを受け、本格的な論文の作業を始める前に急遽帰国した。復職した後のランクは5年前と同じ講師であったが、担当科目は一つ専門科目が付け加わった。「ヴィクトリア朝文学」である。5年間（学部課程から通算すると8年間）英語で英文学を生活していたので、私は日本語で英文学の講義を行うのに難渋した。そもそも文学の専門的な勉強を始めたのは、英語によってである。まして、英文学は表現のメディアそのものが英語である。私は日本語の専門用語と文学的レトリックに疎く、講義中言説の主要部分が、どうしても英語か英語的な表現になった。しまいには面倒くさくなって、講義そのものを英語に切り替えてしまった。学生はだいぶ苦労したようだが、英語の勉強のためにはよかったと評価してくれる学生もかなりいた。その後日本語による文学用語を勉強して講義を日本語でやるようになったが、これは学生のためにも私自身にとっても間違っていたと今では思っている。

琉大への復帰はよかったのだが、論文のためのリサーチには全く困り果てた。資料が不足というより、無いのである。アイルランド関係の資料はおろか、普遍的なイエイツ像を建てようにもその土台のための資料すらない。それから私の苦闘が始まった。私は帰国の前に1カ月かけてイエイツとイエイツ関連のビブを作成し、イエイツの作品集やエッセイ集と最低限の研究図書も私費で購入して帰国したのだが、いざ論文の作業に入ってみると、たちまち資料不足の壁に阻まれた。その詳細をここに記述する紙幅がないので割愛するが、とにかく様々の制約の中でなんとか私なりのイエイツ像を組み立てて216ページの学位論文にまとめた。私としてはけっして会心の出来ではなかったが、書き上げた論文を1967年の秋にミシガン州立大学英文科に提出した。

学位論文が審査をパスして Ph.D. の学位を得たのは1968年、大学院に進学してから10年が経過していた。どこからも援助を受けず、親の仕送りにも頼らず、すべて働いて稼いだ資金でまかなったので、学位授与式の席上で名前を呼ばれたとき、自力で目的を達成した喜びが全身に広がった。また、英米文学の本場で学位を取得するという沖縄人として前人未踏のフロンティアを開拓した

達成感に満足をおぼえた。

学位論文はひとまず仕上げたが、研究上の苦労は依然として絶えなかった。沖縄は英文学研究をする場所としては、世界で最僻地といっても過言ではない。研究資料の不足、資料入手のための時間的・空間的制約、関連分野における研究体制の不備等々の障害がありすぎる。こういう状況で一つの小さなテーマに絞り込んで研究を行うと、いたずらに時間を空費してしまう。内容の充実した図書館に行けば即刻解決できる問題でも、しばらく抱え込むことを余儀なくされる。その間、研究者としては惰眠を食ることになる。私はこの問題を克服するために、イエイツを越え、アイルランドを越え、さらに英文学そのものも越えて好奇心の対象を広げた。そのため、私の学問は散漫で「博学的」の様相をおびてしまった。その中で、せめてもの集中点を見つけようとした試みの一つに文学論と批評理論の勉強がある。この試みは、幸運にも60年代以降の文学批評理論の転換期とタイミングが合い、私は世界の潮流に乗り遅れることなくキャリアの後半を全うすることが出来た。この勉強の成果は暫定的に2冊の本にして上梓した。『ミメシスとエクスタシス—文学と批評の原点』（勁草書房、1984年）と『文学作品の誕生——その文化的プロセスとしての意味』（沖縄タイムス社、1998年）である。このジャンルは、しかし、まだまだ勉強すべきことが多く、「日暮れて遙遠し」の感を深くしている。

## 7. The [Not Very] New Pilgrim's Progress<sup>(10)</sup>

1968年の春、ミシガン州立大学での学位授与式に出席するために渡米したついでに、私はアジア財団の援助によりアイルランドへ飛び、初めて彼の国を旅した。約3週間イエイツゆかりの地を作品と照らし合わせながら廻った。ドラムクリップにあるイエイツの墓、「湖水に浮かぶイニシフリ」で有名なギル湖、日本の能を手本に創作された舞踊劇「鷹の井にて」の源郷であるオックス山中の「トゥラハンの泉」と「鷹の岩」、数々の伝説を生み出したベン・ブルベンの丘、これらの由緒ある場所にはおそらくイエイツが感知したであろう霊気が満ち溢れていた。「イエイツのくに」にじかに触れたことは、アイルランドやイエイツについて書物から得た知識とは違った認識を得たという意味で極めて有意義であった。イエイツ自身の比喩に従えば、「地図が国になった」感じであった。

1972年には、私は全米学術団体評議会（ACLS）のフェローとして1年間アメリカで研究をする機会に恵まれた。母校のミシガン州立大学に身を寄せたが、多くの旧師にも再会し、英文科周辺のキャンパスも元のままで、一種のセンチメンタル・ジャーニーとなった。図書館も勝手知ったる場所であり、ふと院生時代にもどったような錯覚を覚えた。ただ、英文科のロビーの壁に掲げられたロスターに、旧師たちの名前と並んで客員教授としての私の名前が出ているのが時の経過を感じさせた。苦学生時代と違い、この一年は研究費、研究旅費はもとより、家族の往復旅費と生活費を含む実に潤沢な給付を受け、贅沢な気分だと思う存分勉強ができた。受け入れ校はかつて学んだ母校であるから、研究室の提供にも事前の配慮がなされ、学科の事務職員たちも協力的であった。

ほぼ10年後の1981年には文部省の長期在外研究員としてアメリカ、アイルランド、スコットラ

ンドの各地で研究する機会を得た。アメリカでは、恩師 Adams 教授の肝いりでワシントン大学に草鞋を脱ぎ、研究室の提供も受けて4カ月間快適に研究ができた。大変有難かったのは、アダムズ先生が毎週水曜日にブール・セッションをしてくださったことである。イエイツ研究の現況や裏話、批評理論の現在等、新しい知識を得た。

スコットランドでは、イエイツ研究の世界的権威、A.N. Jeffares 教授のもとで研究をした。教授の該博な知識と膨大な資料にアクセスができて幸せであった。更に大きな幸せが私を待っていた。ジェファーズ先生に私の学位論文をみてもらったら、英国で出版したいと言われ、アイルランド文学研究叢書を出している Colin Smythe 社に提案してくださった。話しはとんとん拍子に進んで、アイルランド文学研究叢書の一巻として同社と米国の Barnes & Noble Books 社から同時出版になるという僥倖に恵まれた。しかし、私はこの論文は大幅な改訂を要することを痛感していたので、コリン・スマイス社の了解をえた上でいったん帰国して改訂の作業を進め、新しい章を追加するなどして、2年後の1984年に *The Double Perspective of Yeats's Aesthetic* (複眼のイエイツ美学) と題して英米両国で出版した。この本は、英、米、アイルランド、カナダ、フランス、日本の6カ国で合計8本の書評が出たが、おおむね好評で、その中で *The Times* の「文芸付録」(TLS) に書評が載ったときは高嶺の花が手中に落ちた驚きと喜びを禁じえなかった。また、イエイツの母国アイルランドでも「久々の刺激的な好著」という評価をえてほっとした。ところが日本ではあるイエイツ研究家から「日本人がどうして英語で本を書かなければならないのか」と手厳しい批判を受け、複雑な気持ちであった。

## 8. The Unfinished Act (of my "circus animals")<sup>(11)</sup>

私のイエイツ観はその後変わってきた。今ここで詳しく説明するには紙幅が足りないが、大雑把に言えば、前に排除した文化的・民族的文脈の中で新たなイエイツ像を探求することといえるだろう。イエイツの民族詩人としての側面を排除して以来ずっと気になっていたこの研究テーマに手をつけたのは、1987年にマクミラン社刊の *The Yeats Annual* (イエイツ年鑑) の編集者から論文の寄稿を求められたときであった。イエイツに対する外国文学の影響を異文化接触の観点から捉えた論文を寄稿した。ひと口に外国文学の影響といっても、異文化間の文学的プロセスはさまざまの文化的要素の制約を受けるものであり、ソース・テキストの影や響きがすなおに伝わるわけではない。外国文学の影響とは、そのような制約下にある作家が行う異文化解釈の産物なのである。たとえばイエイツに対する日本の能の影響という場合、アイルランドの民族的・文化的感性をもち、西洋の文化的・文学的伝統の最先端にいるイエイツが、どのような文化的制約の下に、どのような解釈を行ったかを突き止めなければならない。このように文学作品の誕生を文化的プロセスとしてみることによって、アイルランドを越えた普遍的なレベルでの現代詩人としてのイエイツと、アイルランドの文化と歴史の特殊性を背負ったイエイツを、一つのレンズのなかで捉えることができるようになるのである。

1993年にはアイルランドの「スライゴー・イエイツ協会」の招きで、同協会が毎年催している恒例の「夏季国際イエイツ研修会」で講演を行ったが、民族文学と文学言語に対するイエイツの

考えに内在する矛盾について論評した。この矛盾は、アイルランド民族文学のもつ特殊性と理想的な文学言語の普遍性をイエイツが同時に追求したために起きた矛盾である。この講演で私は沖縄の文化的アイデンティティの問題に言及し、アイルランドの文化・民族問題が普遍的な問題であることを強調した。これが意外に受けて、研修会の閉会式で、イエイツ協会会長が私の講演に言及し、イエイツ文学をグローバルな視野で捉えた画期的な研究であると、本人としてはこそばゆい思いのする論評をしてくれた。

この研修会の講演者の一人に、ポストモダニズム理論の大御所であるイーハブ・ハッサン教授がいた。教授とは初対面であったが妙にウマが合い、その後ずっと親交を続けているが、後述する国際英語英米文学教授協会（IAUPE）に私を新会員として推挙してくれただけでなく、1995年夏のコペンハーゲン大会では教授の司会する「現代文学」部門で副司会を務めさせてもらった。この年の夏、ヨーロッパは40年ぶりの記録的な猛暑で、クーラーのない北欧のホテルや大学の教室は蒸し風呂のようであった。その暑さのせいでもあるまいが、図らずも50年前の終戦の年、あの夏の焼け付くような暑さの中で頭上を乱舞する敵機グラマンにこぶしを振り上げて絶叫した少年の日を思い出し、いま平和な国際学会で英語を使って司会をしている自分は幻想の世界にいるのではないか、とふと思った。

スライゴーでの出会いが縁で、私はハッサン教授の本拠地である米国ウィスコンシン大学（ミルウォーキー校）に招かれて特別講義をすることになっていたが、話しが次第に発展して、同校でイエイツ国際セミナーを催すことになり、1996年の秋、私は講演者の一人として招待されて話題提供をした。このときのテーマは、文化的プロセスに対するイエイツの認識についてであった。文化的プロセスに対する認識のあまさが、民族文学と文学言語に対するイエイツの考え方に矛盾を生み出したことを指摘した。

ウィスコンシン大学での学会は、研究者として琉大在任中最後の舞台となった。翌年の1997年3月に私は琉大を定年になったからである。同年4月には沖縄国際大学に招聘されて、大学院研究科設置のための、いわゆる「マル合」教授要員として就任した。ところが、研究科の設置申請をしてみると、なんと7名もの「マル合」教授が認可され、結果的に私など必要なかったことになってしまった。私の赴任によって益を受けたのは、とりもなおさず私自身であった。在任4年間で私は1冊の著書を上梓し、3篇の論文を発表し、3度の国際学会出席を果たした。現役として活動する機会を与えられ、このような研究成果を上げ得たことには感謝あるのみである。

一方、イエイツについての私の新しい考え方は次第に熟してきて、いつ枝から落ちてもいい段階にきているが、そこまで来るまでに私はいくつもの大病に見舞われ、熟した果実の枝に最後のゆさぶりをかけられないまま現役を退かなければならなくなった。1冊の本にまとめるには、半年から1年本場で勉強したいのだが、もうそれは叶わない望みだろう。現在の私の体調もそれを許さない。

イエイツ研究書とは別に、コリン・スマイス社から出したもう一つの本について言及しておきたい。ただし、この本は私が書いたものではない。早稲田大学の関根勝教授との共編による *Irish Writers and Politics* (1990) である。アイルランド作家と政治の問題についてアイルランド、英国、

米国の錚錚たるアイルランド文学研究者たちが貴重な論文を寄稿してくれた。しかし、編集の作業が始まって間もなく私は病に倒れたため、煩雑な編集の仕事はすべて関根教授によってなされた。にもかかわらず、関根教授は私を第一編集者としてあげてくれている。温かい友情に感謝したい。因みに、関根教授はジェフアーズ教授の女婿で、英国で数冊の著書を出している、日英両語が自由自在の語学の達人である。

## 9. Side Shows

最後に、私の専門分野である英文学とは異なる領域での仕事について述べることにする。まずは、延べ10年にわたった辞典編纂の作業である。その辞典とは、小学館の『プログレッシブ英和中辞典』（1980年）と『ランダムハウス英和大辞典』（1994年）のことである。この作業は10余名の沖縄在住大学教員の協力によって達成されたものなので、まずは辞典執筆ならびに校閲に携わった皆さんにお礼を申し上げたい。沖縄のような僻地には、辞典編纂のような全国レベルの仕事に参入する機会はないので、私だけでなく執筆にかかわった皆さんにとっても極めて有意義な仕事であったと思う。私が編集委員として唯一とり文学専攻であるにもかかわらず参加を決意したのもこのような理由からである。たいへん手間ひまのかかる煩瑣な作業で、参加した皆さんはよくがんばってくれたと思う。なお、英和中辞典の仕事への参加は、1976年、当時東京大学教授であった池上嘉彦氏の肝いりによって実現したものである。教授の沖縄英語界への温情を忘れてはなるまい。

思えば私が初めて英語辞典を手にしたのは、中学に入学した昭和18年、戦争たけなわのころであった。敵性語といわれて疎んじられる傾向にある英語に妙に魅力を感じ、この辞書も肌身はなさず、疎開のときも敵潜水艦に襲われた東シナ海をともに渡り、戦争も無事しのいで、沖縄へ引き揚げてのちまで手許において愛用した。その後、生きた英語が身についてくるにつれて、英和辞典が学習の足かせになることが分かり、初歩学習のころの「恩」を忘れて、ボロボロになった辞典を捨てて省みなくなった。英和辞典のページを一枚ずつ千切って食べて英単語をおぼえたという先達の伝説を馬鹿馬鹿しいお伽噺と聞き流して、英和辞典などないほうが英語の上達は速いと生意気に考えたこともあった。

その私が英和辞典の編集をするなど思ってもみなかった。実際に辞典編纂の仕事に携わって、編集の先輩や同僚に教えてもらいながら仕事を進めてみて、外国語辞典編纂のノウハウが昔と比べものにならないくらい格段の進歩をとげていることが分かり、自分の無知を恥じた。しかし、やはり二言語辞典は学習者にとって薬でもあるが、毒にもなるという考えに変わりはない。辞典に使われずに、辞典を使いこなす要領を学習者に指導することこそ不可欠であると痛感している。

私が関わった辞典編集の仕事がもう一つある。それは、英国の Harper Collins 社の引用句辞典、*Collins Dictionary of Quotations*（1995年）である。私は編集助言者の一人として参画したが、40項目にわたって執筆もした。そのうち3分の1くらいはこの種の辞典に初登場のエントリーで、その中には現代アメリカ詩人のゲーリー・スナイダー、古くはインドのヒンドゥー経典『ウパニシャッド』、日本からは紫式部や川端康成等が含まれている。



沖縄文学への関わりについても述べておこう。ただし、英米文学との絡みにおいてである。私は自分の専門領域を弁えて、進んで沖縄文学について発言することは極力控えてきた。しかし、諸般の事情で関わりをもたざるをえないことも多々あった。たとえば、大城立裕氏が芥川賞を受賞したとき、氏の高校での教え子である私はマスコミから発言の場へ押し出された。私も恩師のためには喜んで応じた。座談会に出たこともあるし、新聞に大城文学について論評したこともある。私の英文学の知識がいくらか役に立ったとすれば、大城文学の神話的な可能性を指摘したことであろう。「沖縄は文学不毛の地か」という嘆きが沖縄文学界を支配していた'60年代当時、私は文学の神話的要素について一文を草し、文学的不毛から脱却する道は沖縄の文化的土壌の中から神話的基層を掘り出して文学的表現を与えることだと提唱した。その中で私は大城氏の『亀甲墓』を高く評価し、この作品の示す方向こそ、大城氏ならびに他の沖縄作家が進むべき道だと説いた。

その後、沖縄の神話世界を文学化する作家が続々登場し、中央でも沖縄の「魂の古層」（立松和平）とか、沖縄の豊穡な「文学の鉱脈」（『文学界』1997年4月号）などともて囃されるようになったのには、隔世の感を禁じえない。

しかし、このような沖縄文学のあり方に痛烈な批判を浴びせる論者が現れた。アメリカを代表するポストモダニズムの論客、ウィスコンシン大学のイーハブ・ハッサン教授である。教授は、1996年12月に那覇で行われた「沖縄文学フォーラム」に私の提案で基調講演者として招かれたが、沖縄文学の土着志向がナショナリズムの危険な萌芽を秘めるものとして警告を発したのである。<sup>(12)</sup> この貴重な問題提起は、続くフォーラムの議論の中では完全に無視されてしまったのは実に残念であった。私は、フォーラムの場では一切発言をしなかったが、プライベートの談話ではハッサン教授に「沖縄文化と沖縄の民族性は、狂信的なナショナリズムと本質的に対極的な位置にある」と反論した。教授はちょっと当惑したようであった。私は、ハッサン教授とは別の観点から昨今の沖縄文学の過剰な土着志向に対して懸念をもっている。しかし、この問題は英語・英文学から外れるのでここで止める。

以上のほか、詩と批評誌『ユリイカ』（2000年2月号）のアイランド文学特集に論考「アイランドと沖縄の文学」を寄稿したことや、『世界民族問題事典』（平凡社、1995年）のイエイツの項を執筆したことも余技の中に数えてもいいかも知れない。

## 10. The Royal Box or the Peanut Gallery?

この世界に身を置いていると、どうしても「学会」なるものと関わりができてくる。私も、例に漏れず、幾つかの学会に参加した。日本で初めて学会に出席したのは、1966年の第2回日本イエイツ協会大会であった。京都の同志社大学で行われたこの大会に出席して、私は日本のイエイツ研究者の代表的な顔ぶれを知ると共に、日本のイエイツ研究の動向も大体つかむことができた。アメリカの学界で育った沖縄人の私にとって意外だったのは、学会に学説上の対立とは無縁の派閥があることであった。それが極めて文化的な現象であるため、異文化に属する私にはなかなか窺い知ることのできない世界であるらしかった。沖縄人である上に、日本の大学を出ていない私

は、初めからどの派閥にも属さない＜一匹狼＞であったが、この気楽な立場を私はずっと維持してきた。英米で著書を出してから、評議員に選出されるようになったが、学会の運営に関しては依然として＜一匹狼＞、あるいは＜はぐれ狼＞である。

この学会と会員が重なっているもう一つの学会がある。「国際アイルランド文学協会日本支部」(IASIL-Japan)である。この学会は「国際アングロ・アイリッシュ文学協会」(IASAIL)の日本支部として発足したが、その後親学会の名称変更にもない日本支部も現在の名称に変わったのである。IASAILの創始者がジェフアーズ教授である関係で、私は日本支部の立ち上げに関与した。その第一回大会の発会式が早稲田大学の大隈講堂で行われた際、私は、ゲストとして記念講演をしたIASAIL名誉会長、ジェフアーズ教授の紹介者を務めた。中央大学で行われた第2回大会では、開会式で挨拶するアイルランド大使とブリティッシュ・カウンシル代表の紹介を行った。この学会支部の創立当初から、私は委員を務めたが、大学の現役を退いたのをしおに辞任した。

日本英文学会も一時入会していたが、海外研修で長期出張をしたのを機に退会した。まだ会員だったころ、1970年の九州支部大会でシンポジウムに引っ張り出されて、なんとアメリカ文学のHenry Jamesについて30分の発表を行った。その翌年はシンポジウムを組織するように要請を受け、「ルネサンス期におけるエデンのテーマ」と題してシンポジウムを行った。金城盛紀、瀬名波栄喜、屋宜盛峰の三氏が講師として協力してくれた。

国際学会では、上記IASILの日本支部会員として自動的に本会員でもある。しかし、私は年次大会にはあまり熱心な出席者ではない。でも、顔を出すと世界各地から集まる会員の中には顔馴染みの人や文通で知り合った人もいるし、未知の人から拙著について話し掛けられることもあり、行けば楽しい学会である。一度副会長の候補に上がったこともあるが、投票の結果落選した。

私が所属するもう一つの学会は、国際英語英米文学教授協会 (IAUPE) である。この学会は、希望して入会できる学会ではない。会員の推挙と選考会 (International Committee) の審査が必要で、「国際的に評価された教授」というのが会員の資格条件である。私は、既述のように、1993年にイーハブ・ハッサン教授の推挙によってこの学会に入会した。3年毎に大会が催されるが、著書で馴染んだ有名教授と朝食のビュッフェで肩をぶっつけて「やあ、失礼！」といいながら気安く自己紹介をし合える和やかな雰囲気漂う学会である。

## 11. The Denouement

2001年——この年は1951年に始まった私の英語・英文学人生のちょうど50周年に当たっていた。50年前の8月4日、土曜日に私は「ガリオア米国留学生」試験を受けたが、奇しくも50年後の2001年の8月4日も土曜日で、この日はたまたま私の所属するIAUPEがドイツのバンベルク大学で開催した設立50周年記念大会の最終日であった。私は、入会以来今度で3度目の出席であったが、この記念すべき50周年大会への参加は、私にとって個人的にも特に記念すべき出来事となった。私は、この大会で「アイルランド、スコットランド、ウェールズ文学部門」での口頭発表と50周年記念論文集への寄稿の招待を受けた。記念論文集への招待は、協会を代表する20人の会員の一人として指名を受けたものであり、私にとっては身に余る光栄であった。私のちょうど半世紀に

わたる英語・英文学人生を締めくくる上で、これほど晴れがましい形は考えられない。しかも、協会の歴史と私のキャリアが同日にGolden Jubileeを記念したのだから。

大会で口頭発表した論文の題名は次の通りである。"Language, Literature, and Cultural Identity in the Nation With a 'Grafted Tongue': the Irish and Okinawan Experiences"（言語と文学と「移植された舌（言葉）」をもつ民族のアイデンティティーアイルランドと沖縄の経験）。この発表で、私はアイルランドと沖縄に共通する母国語喪失の文化的危機と、この事態に対する両国の文人たちの反応について報告した。"Grafted Tongue"は、アイルランドの現存の詩人、ジョン・モンタギューの同名の詩からの借用であるが、モンタギューは、ゲール語を失って英語化してしまったアイルランドの文化的状況を比喩的にそう表現しているのである。沖縄の同じ状況を沖縄口で表すと「口ぬしーら」（しーら＝背負い込んだ災い、苦悩）とでもいえようか。

記念論文集への寄稿論文の題名は"The Creative Circle in the Intercultural Literary Process"（異文化間の文学的プロセスにおける創造的循環）である。テーマは文学翻訳論で、文学作品の翻訳者の前に立ちはだかるさまざまな文化的な障壁について論じている。

私の英語・英文学人生50年を振り返ってみるとき、いろいろなことが胸中を去来する。新渡戸稲造の留学記に触発されてこの世界を目指したものの、少年の夢の実現に歓喜する一方で、その後直面した現実の厳しさにたじろぐ場面も多々あった。この専門分野に対する沖縄の劣悪な立地条件には大学を卒業するまで思いも及ばなかった。私のキャリアの大部分が資料不足に悩まされる歳月になったのは、その思慮の足りなさの報いといえるかも知れない。それは、まさに給水に苦しみながら砂嵐のなかを手探りで進む砂漠の旅に乗り出したようなものだったのである。

しかし、劣悪な条件をうんぬんする前に自らの能力と努力に憾みがなかったか反省する必要がある。誇大妄想ともいえる少年の夢を抱いてから50年の歳月が過ぎた今、その夢に見合うだけの語学的ならびに文学的資質と能力を自分が具えていたか、いささか疑問なしとしない。だが、今更そのような自省をしてみたところで詮無いことである。むしろ、自分の能力や資質の限度を越えて、一定の仕事ができた幸運を喜ぶべきであろう。そして、家族を含めて多くの人びとの愛と支えによってこそ今日があることに感謝しなければならない。半世紀以上にわたる私の人生ドラマがさわやかなカタルシスをもってひとまず「幕」を迎えたことに感謝しなければならない。

（2002年盛夏）

[注]

1. *As You Like It*, Act II, Sc. vii. 139～140行
2. "Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour. July 13, 1798"
3. 『歸雁の蘆』(弘道館、明治40年)
4. 1946年6月に現具志川市に設立、1950年琉球大学の開学と共に廃校。
5. Tennessee Williams の *Streetcar Named Desire* (1947) はニュー・オーリンズが舞台。
6. cf. 英国の諺、 "All work and no play makes Jack a dull boy."
7. 全習得科目の平均点。各科目それぞれA=4、B=3、C=2、D=1ずつ配点される得点×単位数の合計÷總単位数。
8. 「文学一般」、「古代・中世文学」、「ルネサンス文学」、「王政復古および18世紀文学」、「19・20世紀文学」、「アメリカ文学」の6分野の試験を2週間(月水金)で行った。
9. Daniel Booneの西部開拓路。wilderness roadともいう。
10. Mark Twainの外遊記、*Innocents Abroad, or, The New Pilgrim's Progress* (1869) より。
11. 「未完の幕(演技)」。circus animalsはイエイツ詩、 "The Circus Animals' Desertion" より。イマジネーションが働かなくなったイエイツが自分の詩のテーマ(サーカスのショウの動物たち)に逃げられたと嘆いている詩。
12. ハッサン教授は那覇講演を書き改め、*World Literature Today*誌(1997年冬季号)に発表した。が、より厳しい批判を沖縄文学の現状に加えている。因みにこの論文の冒頭に私への献辞が記されている。